

今伊勢の家



「高い耐震性」と「開放的な空間」の両方を求められた場合

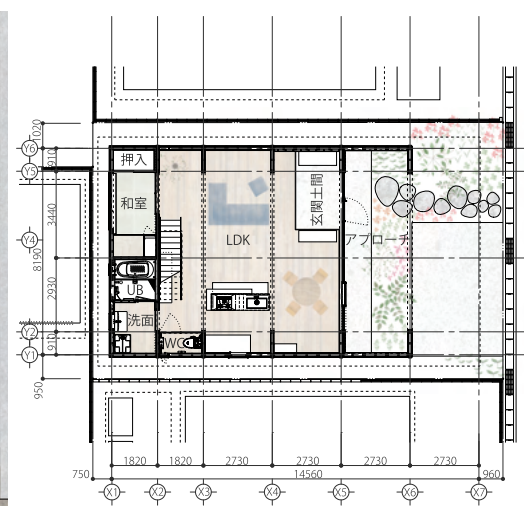
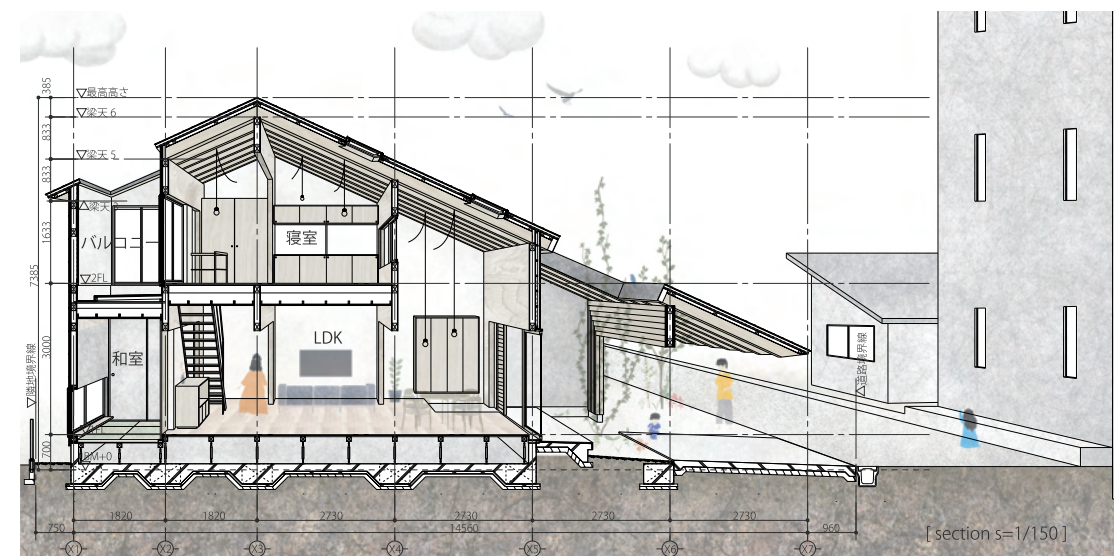
通常2階の方が1階よりも構造上必要な壁量が少なくなるため2階にLDKをもっていく方が理にかなっている。

ここでは、前面道路が個人の所有物である私道（生活道路）という周辺環境であることから、内外がシームレスに連続する空間を計画することで与えられた条件の中で最大限の空間的ボリュームの獲得を目指す。

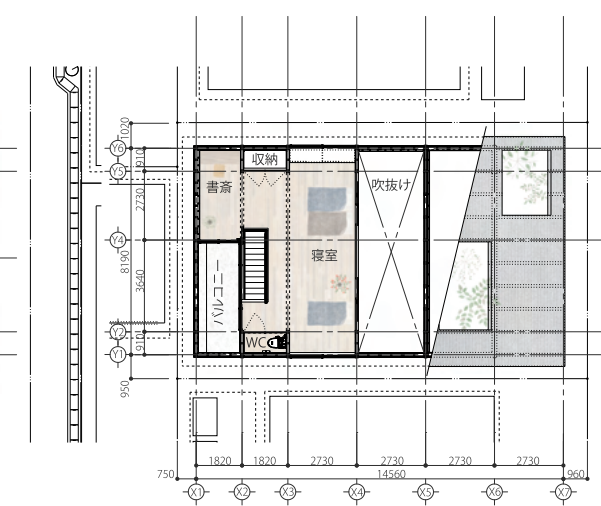
幅8mの「門型フレーム」が並ぶだけの単純明快な構成とすることでバランスの良い耐震性能と大きな開口部を両立させた。

計画地は古くから繊維工場が栄えた工業地域に属し、近年の開発により宅地化され、地域産業と住宅が共存して居住環境が作られている。前面道路はその宅地化によってつくられた私道でありこの道に接する数件の家で共有する行き止まりの「生活道路」である。

この辺一帯は主要な道路から枝分かれのように伸びるこの「生活道路」が張り巡らされ、それぞれ固有のコミュニティが形成されていた。この道路ごとに異なる独自の場所性をそのまま住空間に取り込むことで地域産業の副産物的にできたコミュニティを住宅地としての新たな風土として地域づくりに寄与することができないかと考えた。



[1F plan s=1/300]



[2F plan s=1/300]



「門型フレーム」は耐震要素としての他、一定の間隔で並ぶことで空間にリズムを与え、街との距離感を測る物差しとしての役割を担い、レールを仕込むことでフレームごとに生活に応じて簡単にプライベート化することを可能にした。

限られた敷地内を有効に活用するために軒を外部空間まで連続させることで大屋根の下で住み手の生活が徐々に地域にしみ出ていくことを期待している。

近隣には高さのある建物もあり偶然にも程よく包まれた周囲の環境のおかげで道路を含んだ隣地までを生活空間として取り込むことができた。



周囲に程よく包まれプライベート化する外部空間



フレームが並ぶ様子が意匠にも表れる



道路までもインテリアとして取り込む



リズム良く並ぶフレームによる大きなワンルーム空間



フレームごとに簡単にプライベート化が可能



2本の合成梁を現場にて加工



木梁とFBをピンポイントで合わせる精度が求められた



完成した合成梁



施工者の高い技術により精度の高い建て起こしが実現



門型フレームが並ぶ建て方

門型フレームは最大梁成 150mmの小断面の流通材だけで構成することでコストを抑えながら6mを超えるスパンを形成し大開口を持つ耐力壁として地震力に抵抗している。

大屋根を規定内の建蔽率で実現するためには面積を調整する屋根開口と片持ちで跳ね出す軒先を両立させることが必須でありスチール製のフラットバーを木梁に差し込んだ2本の合成梁を介して軒先で各梁を吊り上げることで2.7mの跳ね出しと屋根開口の両立が可能となった。住み手の求める要望と土地の成り立ちや規制、それを解決するための構造形式これらをスクラムすることでできたこの土地に根付いた建ち方である。